

「まふいとヨルの日常パート②」

朝。ヨルファミリア本部。まだ全員が起ききっていない時間。静かな廊下を、ヨルが一人で歩いていた。寝起き。髪も少しだけ乱れている。

「……眠い」

欠伸をしながら大食堂へ向かう。すると――

「おはようございます、ヨル」

「うわっ」

曲がり角。そこにまふいが立っていた。完璧に身支度済み。

「……まふい、いつからいたの？」

「少し前からです」

「少しって？」

「ヨルが起きる十五分ほど前です」



「なんで起きる時間分かるの？」

「大体分かります」

「怖い怖い」

まふいはヨルの髪を見る。

「少し乱れていますね」

「寝起きだし」

「直します」

「え、いいよ自分で——」

「こちらへ」

「はい」

ヨル、素直に座る。まふいは櫛を持ってきた。

「……」

「……」



静かな朝。まふいが丁寧にヨルの髪を整えていく。

「痛くないですか？」

「大丈夫」

「引っかけたら言ってください」

「うん」

しばらくして、ヨルが鏡を見る。

「綺麗になった」

「当然です」

「ありがと、まふい」

その一言。まふいの手が一瞬止まる。

「……どうしたの？」

「いえ」

ほんの少しだけ。嬉しそうだった。



朝食。ヨルがトーストを食べている。まふいはその隣。いつもの席。

「まふい」

「はい」

「そっちのジャム取って」

「どうぞ」

「ありがとう」

渡す。ヨルが塗る。食べる。まふいを見る。

「……」

「……」

「まふい」

「はい」



「さっきから何見てるの？」

「ヨルを」

「知ってる」

「では問題ないかと」

「問題あると思うなあ」

まふいは少し考える。

「見てはいけませんか？」

「いや……ダメじゃないけど」

「では見ます」

「強い」

ヨルは諦めてトーストを食べ続けた。まふいは満足そう。



午前。今日は任務なし。ヨルは大食堂の一角にあるソファで本を読んでいた。まふいはその隣。

「……」

「……」

ページをめくる音だけ。十分後。ヨルが気づく。

「まふい」

「はい」

「何もしてないよね？」

「ヨルの隣にいます」

「それは知ってる」

「十分です」

「暇じゃないの？」

「いいえ」

「本とか読まない？」



「読みません」

「ゲームとか」

「しません」

「昼寝」

「ヨルが寝るなら」

「全部私基準!？」

まふいは真顔。

「当然です」

ヨルは笑ってしまう。

「もう……好きにしなよ」

「はい」

その直後。まふいが少しだけヨル側へ寄る。肩が触れる。

「……」



ヨルが横を見る。

「これも好きにした結果？」

「はい」

「そっか」

それ以上は何も言わなかった。

昼前。ヨルが立ち上がる。

「飲み物取ってくる」

まふいも立つ。

「私も行きます」

「すぐそこだよ？」

「はい」

「一人で行けるよ？」



「知っています」

「じゃあなんで」

「一緒に行きたいので」

「……」

ヨルは少しだけ黙った。そして――

「じゃ、行こっか」

「はい」

二人でキッチンへ距離にして十数メートル。それでも、まふいにとっては立派な同行だった。

冷蔵庫。ヨルが開ける。

「何飲む？」

「ヨルと同じもので」



「またそれ？」

「はい」

「じゃあこれ」

二本取る。一本をまふいへ。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

二人で飲む。ヨルが何気なく言う。

「まふいって本当に私と同じの選ぶよね」

「嫌ですか？」

「別に」

「ではこれからも」

「たまには自分で決めてもいいんだよ？」

まふいは少し考える。そして飲み物を見た。



「では」

「うん」

「ヨルと同じものを選ぶ、と自分で決めました」

「そう来たかあ」

午後。ヨルが書類仕事。まふいは向かい側。静かに待機。

「……」

「……」

「……」

「……」

ヨルが顔を上げる。

「まふい」

「はい」



「眠くない？」

「少しだけ」

「寝ていいよ」

「ヨルが仕事中なので」

「関係ないよ」

「ですが」

「ほら」

ヨルが自分の肩を軽く叩く。

「使う？」

まふいが固まった。

「……」

「どうしたの？」

「よろしいのですか？」



「いいよ」

「本当に？」

「何回聞くの」

数秒後、まふいはそっとヨルの肩へ頭を預けた。非常に慎重。
まるで壊れ物に触れるみたいに。

「力抜いていいよ」

「……はい」

ヨルはそのまま書類を読む。五分。十分。返事がなくなる。

「まふい？」

「……」

寝ていた。ヨルが横目で見ると、普段の張り詰めた表情がない。
静かで、少し幼く見える寝顔。

「……普段からこれくらい力抜けばいいのに」

小さく呟く。すると、まふいの手がヨルの袖を掴む。ぎゅ。



「……」

寝ている。

「無意識？」

返事なし。ヨルは袖を掴む手を見る。そして少しだけ笑った。

「まあ、いいか」

そのまま仕事を続けた。

一時間後。まふいが目を覚ます。

「……」

状況確認。ヨルの肩。自分の手。ヨルの袖を掴んでいる。

「……！」

すぐ離す。

「申し訳ありません」



「何が？」

「寝ていました」

「寝ていいって言ったじゃん」

「それに……袖を」

「いいよ」

「ですが」

ヨルがまふいを見る。

「まふい」

「はい」

「たまには私に甘えてもいいんだよ」

沈黙。まふいの目が僅かに揺れる。

「……私は」

「うん」



「ヨルを守る立場です」

「知ってる」

「ですから、甘える必要は」

「守る側は甘えちゃダメって誰が決めたの？」

「……」

返せない。ヨルは笑う。

「私が総帥なんだから」

「はい」

「私の命令」

「……」

「たまには甘えなさい」

まふいは完全に黙った。数秒。そして――

「……命令でしたら」



もう一度。そっとヨルの肩へ頭を乗せた。ヨルが笑う。

「素直」

「命令ですので」

「はいはい」

でも、まふいの口元は少し緩んでいた。

夕方。二人で中庭回廊。夕焼け。風が少し冷たい。ヨルは手すりにもたれている。まふいは隣。

「平和だね」

「はい」

「こういう日、嫌いじゃないな」

「私もです」

「戦わなくていいし」



「はい」

「皆も元気だし」

「はい」

少し間。ヨルが横を見る。

「……まふいは？」

「何でしょう」

「こういう日、何が一番好き？」

まふいは即答しなかった。珍しく考える。そして――

「ヨルが笑っていることです」

ヨルが止まる。

「……それ？」

「はい」

「もっとあるでしょ」



「ありません」

「美味しいものとか」

「ヨルと食べるなら」

「寝ることとか」

「ヨルの近くなら」

「遊ぶこととか」

「ヨルとなら」

「……」

ヨルが呆れたように笑う。

「本当に私ばかり」

まふいは静かに答えた。

「それでいいのです」

その言葉には迷いがなかった。ヨルは夕焼けを見る。



「……そっか」

それだけ。でも、拒まなかった。

夜。ヨルの部屋。コンコン。

「ヨル」

「んー？」

「入ってもよろしいですか？」

「いいよ」

まふいが入る。

「どうしたの？」

「特に用事はありません」

「じゃあ何しに来たの」

「顔を見に」



「今日ずっと一緒だったよね？」

「はい」

「……」

「……」

ヨル、笑う。

「まふいらしいね」

ベッドの端を軽く叩く。

「座る？」

「はい」

並んで座る。

「今日は楽しかった？」

ヨルが聞く。

「はい」



「何もしてないけど」

「十分です」

「……そっか」

少し静かになる。まふいがヨルを見る。

「ヨル」

「ん？」

「明日も隣にいていいですか？」

ヨルは少し驚く。いつもなら。まふいは確認などしない。当然のように隣にいる。だからこそ。その問いは少しだけ特別だった。ヨルは答える。

「いいよ」

「明後日も？」

「いいよ」

「その次も？」



「……毎日聞くつもり？」

「必要であれば」

ヨルが吹き出す。

「じゃあまとめて言う」

まふいが見る。

「これからも好きなだけ隣にいなよ」

「……」

「まふいの席、そこなんでしょ？」

ほんの一瞬。まふいが目を見開く。そして、今までで一番柔らかく笑った。

「はい」

ヨルの隣。それは第2席としての位置ではない。護衛としてでもない。命令された場所でもない。ただ、まふい自身がいいたい場所。



「では」

まふいが少し近づく。

「これからも離れません」

「いや、多少は離れて」

「先ほど好きなだけと」

「早速言質取られた！」

「ヨルの命令は絶対です」

「そういう時だけ便利に使わないで！」

廊下までヨルの声が響く。その少し後。部屋から二人の笑い声が聞こえた。戦いのない夜。事件もない夜。特別なことなど何も起きない。それでもまふいにとってはヨルの隣にいられるだけで、十分すぎるほど特別な一日だった。

